

劇団√根

演劇ハックノート#003

2018年 7月 27日

『グレイテスト・ショーマン』はストーリーつきで♪



◆はじめにのはじめに

最近、ハリウッドやディズニーで制作されるミュージカル映画が人気です。もともと舞台上演されていた作品の映画化ではなく、オリジナルのミュージカルドラマや映画としてリリースされることが多いようです。この5,6年でも絶対数は少ないものの、

- 『レ・ミゼラブル』(2012) Wikipedia: <https://goo.gl/d2jWyb>
- 『アナと雪の女王』(2013) Wikipedia: <https://goo.gl/aRIIXQ>
- 『ラ・ラ・ランド』(2016) Wikipedia: <https://goo.gl/feXI7E>
- 『美女と野獣』(2017) Wikipedia: <https://goo.gl/TQHa43>

と、名作・力作ぞろいといってもいいでしょう。

そして2018年ではまちがいなく『グレイテスト・ショーマン』ですね。

(Wikipedia: <https://goo.gl/Pxihkw>)

一言で言えば伝説の興行師P.T.バーナムの半生を描いた作品です。

(Wikipedia: <https://goo.gl/X33Sa4>)

バーナムのすごさは一言では言えませんが、歴史的なインパクトと言う意味で一つだけ。「サーカス」の呼び名を最初に使ったのはバーナムです。

この映画は彼のエネルギーをビジュアルと音に具現化した、まさにゴージャスな歌・ダンスナンバーで綴られています。

が、おいら自身は歌・踊りの迫力に圧倒はされたものの、ストーリーと歌のトータルなバランスに疑問を感じました。なんというか、舞台のミュージカルを見てウキウキして劇中歌を口ずさみながら帰るというふうにはなかったのです。

「楽しい音楽映画ではあったけれどミュージカルではなかった」という印象です。

まあ、作品の批評はこれくらいにしますね。

ここまでは前振りです。今回の話題はここからです。

◆はじめに

ある芝居仲間がこの『グレイテスト・ショーマン』を見ていたく感動したそうです。

それで、自分の劇団でぜひこれを舞台にして上演しようと声を上げました。

その劇団には子供も沢山いて、その中のある親御さんがこう言ったそうです。

「障害をもった人を見世物にする話を子供に話せない、教育に悪い」

「歌やダンスだけならいい」

なるほど。普通の人の感覚というのでしょうか。確かに描かれている時代は1800年代後半で、現代ではありえないようなサーカス興行のお話ですから、たしかに今の常識では捉えがたいストーリーかもしれません。

しかし私はこの作品は、

現代だからこそ、子供のためにも、しっかりとストーリー付きで上演するべき

だと強烈に思います。以下、私なりの見解を書き綴りました。

親御さんの不安を払拭できるかどうかはわかりませんが、劇団の皆さんで考える材料にはなるんじゃないかな、と思います。

◆バーナムの業績: 当時から今まで「賛否両論」

バーナムの業績はプラスマイナスどちらの評価にも別れています。それを整理して箇条書きにしてみました。

◎マイナスイメージ

- 障害者・奇形者を見世物(好奇の対象)にして食い物にした
- 芸術志向の批評家「下品な馬鹿騒ぎ(サーカスの語源)」とコキ下した
- 奇形や障害を忌み嫌い目を向けたくない人々はそもそもこの種のパフォーマンスを毛嫌いした
- 日本においても江戸時代から「見世物」は存在し、さらに1800年代にできあがったこのマイナスイメージを引きずっている
- 「言うことを聞かないはみ出しモノはサーカスに身を売られる」といったたぐいの、典型的な「サーカス」の負のイメージ

◎プラスの解釈

- 当時の社会では目を背けられる存在の障害者たち(フリークス)。親や親類にすら疎まれる存在。そんな彼らを光の当たる場に引き出し、主役にして大人気を得た
- 実際に辛い境遇にあった彼らを一人ひとり説得し劇団に招き入れたのがバーナム。
- 「他の人たちと違うからいい」というバーナムの熱心な言葉に背を押されて彼らは活躍した。
- 「のぞき見趣味」「怖いもの見たさ」という古い見世物のイメージを覆したのがバーナムのショウ。
- さまざまな趣向を凝らし、子供から大人まで飽きさせない、遊園地のような雰囲気、今でいうとシルク・ドゥ・ソレイユのパフォーマンスに近い演出が施されていた。

◎映画「グレイテスト・ショーマン」のテーマ

- 現在、世界中でレイシストのヘイトスピーチが激増している。日本でも「普通じゃない」人への攻撃・差別・虐待が絶えない
- その「風潮」のに対してエンタテインメントという形で真っ向から「それでいいのか」というメッセージを送っているのがこの映画
- これがアメリカ映画だという点も注目に値する。保護主義・排他主義に走っているアメリカにも、多様性を主張する人もいるのだということの象徴。

- 主人公のバーナム自身も名声に心を奪われ、自分の団員たちに冷たくしてしまう。そういう人間の心の移ろいも描かれている
- 答えを出さない。安易に「めでたしめでたし」にしない。それがこの映画の奥深さ

◆だんぷてい・ダイの考え

ようやくですが、上記の評価を踏まえた上で、ここから私の考えです。

1.まとめて言うと.....

上記のように、バーナムはさまざまに評価される人物です。この作品『グレイテスト・ショーマン』自体も様々な批評がなされています。私自身、ミュージカル映画としての完成度はそれほどではないと思っています。Wikipediaによれば、米国の批評をトータルすると50～60点といった所ようですし、私の評価もあながち異端ではないと思います。

その一方で私の芝居仲間のように絶賛して舞台上演を熱望する人もいます。

これこそが「多様な価値観の社会」を象徴しているのです。バーナムという稀有な興行師の足跡を追い、彼の業績や生き様、人となりを見つめることは、これからの社会を担うべき若い世代にとって、とてもよい教材になります。

作品中から歌や踊りだけを取り出して楽しむのもいいですが、それではこの作品に取り組む価値は100分の1くらいに薄れてしまいます。

『グレイテスト・ショーマン』はさまざまな「オープン・クエスチョン(Yes/Noで答えられない疑問)」を投げかけます。ストーリーを追いながら、それらを考え、試行錯誤しながら演じることで、参加者はきっと大きなものを得るでしょう。

そしてそれは観客にもきっと届くはずですよ(演出家の腕次第ではありますが)。

子供も大人も、キャストも観客も、答えを用意する必要はないのです。

舞台上演作品として『グレイテスト・ショーマン』に取り組むのであれば、バーナムやその仲間たちのストーリーをしっかりと展開した上で、歌と踊りを楽しんでほしいと心から思います。

2.もう少し具体的にいいます。(長いです)

言い足りないことを補足しつつ、上記の内容を詳しく述べます。

◎私達はバーナムを超えられていない

バーナムの功績は、人目を避けて生きていかざるを得なかった当時の身体障害者・奇形者(フリークス)に光を当て、「見世物＝化物をただ物珍しく見せるだけ」ではなく「ショー＝エンタテインメント」の担い手として彼らを扱ったことです。

「障害者福祉」などという概念もほとんどなかった時代、彼がやったことは衝撃的で、当時大変な賛否両論を巻き起こしました。特に上流志向、芸術志向の社会層には受け入れられずきつい批判にさらされました。

しかし、ショーを見に来た人々に直接的な感動を与え、彼らフリークスはスターになりました。その事実はまぎれもないことです。これは当時の社会にとってきわめて驚くべきことだったに違いありません。

現代は障害者のダンスチームや和太鼓チーム、バンドが活躍する時代ですが(売れば、ですけどね^^)), 一方で障害者に対する差別や虐待はなくなりません。

バーナムは100年先を見据えたインパクトを当時の世間に与え、後世のわれわれに

「俺はこうやって障害をエンタテインメントにするというブレイクスルーを作り出した。さあお前たちはどうするんだ？」

という課題を投げかけているように思います。

しかしどうでしょう。2010年代の現在、世界中でテロや内紛、ヘイトスピーチなど、国家間民族間の憎しみ合いが絶えません。障害者の大量殺人事件、子供を使ったテロ、女性への集団暴行など、異常だとしか言いようがない事件は枚挙にいとまがありません。

インターネットが発達した分、まるで憎しみや異常さまでネットに乗って猛烈なスピードで広がっているようです。

私達は残念ながら、いまだにバーナムの業績を超えられず、彼の出した宿題に答えられていないのです。

◎賛否両論大いに結構

その半面「世のはみ出しモノはサーカスに身を売られる」というような負のイメージを作り上げてしまったのも実はバーナム(と当時のマスコミ)といっても過言ではありません。

またバーナムの大言壮語のほら話による宣伝、ショーの演出によって「興行師はホラ吹きで信用できない山師」という、興行師のイメージも定着しました。いまでも米国ではそういうやり方を受け継いでいる世界があります。ボクシングやプロレスの試合がそうですね。

高級志向で高邁な芸術好きの上流社会層からは忌み嫌われたようです。アメリカという国は若いだけに上流階級に憧れが強いいため、なおさらだったでしょう。

その結果、当時から現在に至るまで、いまだ賛否両論は続いているわけです。

賛否両論、おおいに結構ではないですか。

バーナムのように社会に波紋を呼ぶ言動をきっかけにして、例えば、

- 「あれはやりすぎだ ↔ いやあれはあれでいい」
- 「障害者の人権蹂躞だ ↔ 当時の障害者の悲惨な境遇を覆した」

といった議論が巻き起こるのはたいへん結構なことではありませんか。

これらのことを踏まえれば、バーナムの業績を学び、彼の半生を描いた作品を演じることは、若い世代の教育に、大変よいことだと思われそうです。

なぜならば、世の中には「普通じゃない人」が沢山いるということを学べるからです。

「普通じゃない人々」は普通じゃないゆえに好奇の目で見られ、時に化物扱いされ社会から追い出されます。

しかし常識を覆して彼らに手を差し伸べ、人々の前に堂々と出てスターになる道を開拓する人も存在します。バーナムのようにです。

- それを見てどう感じるか。
- もし自分だったら。
- もし親子兄弟がそうだったら。
- 普通じゃない彼らと一緒に、圧倒的に面白いことを生み出す社会をつくるのか。
- 普通じゃない彼らを排除し、見て見ぬふりをして「普通」の人たちだけで集まってさして面白くもない社会に安心するのか。

こういう選択肢は、自分の判断で選び取らなくてはなりません。その力こそ、若い世代には身につけてほしいではありませんか。

◎オープンクエスチョンに向き合う

『グレイテスト・ショーマン』のような作品に真摯に取り組むと、さまざまなオープン・クエスチョン(Yes/Noで単純に答えられない質問)にぶつかります。

- 自分がフリークスだったら「普通の人」に対してどんな思いを抱くだろうか。酷い仕打ちを受けでも生きて行かざるを得ないとしたら？
- 自分が普通だったら、フリークスと友達になれるか。
- バーナムのサーカスを見てフリークスのパフォーマンスに心から拍手を送れるのか。
- バーナムのサーカスが自分の町に来ることになったら反対するか賛成するか。

.....などなどなど.

こういう大きくてオープンな質問に直面した場合、答えにどうやってたどり着くのか。最初はそれすらわからないわけです。

それにはひたすら、自分の心で感じ、自分の頭で考え、自分の体で行動するしかありません。

生々しく泥臭くのたうち回り這いずり回る

それこそが生きている証でもあるわけです。そしてそれでもなお、

何らかの答えにたどり着くかどうか、誰も保証はしてくれません。

地図も羅針盤もなく船出をするようなものです。本当の人生の岐路においてなにも準備せずいきなり出港すればすぐに沈没しかねません。

最初は小さな池で、次は川で、次は湖で、そして最後は海で、自分の力で船を操れるようにする。

これこそが、教育らしい教育だと思います。

◎大人がやるべきこと

大人がすべきことは答えを用意することではありません。

大人が用意する答えは、成功も失敗も含めた過去の経験の上に成り立っています。その経験を後世に伝えることは確かに貴重なことです。

ですが、いま現在から未来に向かう時、その答えはベストアンサーとは限らない。

なぜならば未来は一つではないからです。

過去から導き出したものが必ずしも未来に役に立つとは限らないからです。

ましてや人種問題、民族問題、障害者問題は簡単ではありません。すっきりした答えなど誰にも出せないのです。

しかしこういう答えにくいこと、答えがわからないことであっても、大人が隠したりうやむやにしていまうべきではありません。

それは子供たちの考える力を奪い、未来を創り出す力を奪うことです。

そもそも子供は人間です。大人が「忖度」して「あれはやめておこう」「これは知らせないでおこう」というのは、子供たちの能力を見くびっています。

※もちろんこれは程度問題です。小さい子に極度なエログロは見せるべきではありません。が、ある時期になれば「こういう世界もある」ということは知らせるべきです。さらに「自分たち大人も知らない、理解していない世界もある」ということもしっかり知ってもらうべきです。

大人がすべきことは、深い問題を含んだテーマに思い切りチャレンジさせてやることです。

すぐに答えがでなくても構わないのです。ひとつひとつの経験がやがて澱のように沈殿して結晶化し、それがいつか析出して何らかの答えの形を形成するように動き出す時がきつときます。

それまでしっかり見つめ続けてやる、それまでの安全や平和を保障する、大人ができるのはそれだけです。

何度でもいいですが、簡単な問題を用意して、さらに答えを用意したり説明したりするのが大人の役目ではありません。むしろ、すぐには答えが見つかりそうにない深くて大きな問題や疑問にも、諦めずに取り組み続けられるような環境をつくり、応援してあげるのが大人の一番の役割です。

そういう意味で、この『グレイテスト・ショーマン』という作品は教育材料としてとても重要で、素敵な作品だと思います。

◎『グレイテスト・ショーマン』はストーリーつきでない♪

作品の一部の歌や踊りをただ愉しめばいいという考え方もあります。

しかし少なくともこの作品は、それではダメだと思います。

それではバーナムの提示したテーマ、またこの映画が制作された意図を組むことはできません。

「普通でない人」を含めた様々な人間模様、そこに去来する人々の胸の内、それこそがもっともすぐれたショーであるといっても過言ではありません。

舞台上演作品として『グレイテスト・ショーマン』に取り組むのであれば、バーナムやその仲間たちのストーリーをしっかり展開し、その上で歌と踊りを楽しんでほしいと、心から思います。

以上です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございました。



この文が、ちょっとしたグループの演劇や市民劇、高校の演劇部などで困っている人の一助になれば幸いです。

だんぷてい・ダイ(劇団√根)

※だんぷてい・ダイ:2002年市民ミュージカルにスタッフとして参加。それ以来15年以上、主として市民演劇に俳優、舞台監督、音響、作曲、脚本、演出として携わる。2015年劇団√根を一人で旗揚げ。2018年演劇ユニットグリムを旗揚げ。